

滝沢克己『聖書を読む マタイ福音書講解』の研究 その五(下)

富 吉 建 周・中 島 秀 憲

四

次に、塚本虎二の「イエス伝道概観」(マタイ 四章23-25節)の解釈について、その『イエス伝研究 第一巻』¹⁾に即して、検討することにする。同時に、マタイ四章二三節はマルコ一章三九節「それからガリラヤ中にあるその礼拝堂で教えを説き、悪鬼を追い出しておられた」というマルコの「総括的な記事」に対応するものであると言われているのであるが、その節にマタイは、マルコにない「御国の福音を宣べ伝え」という言葉を挿入しているのである。即ちマタイ四章一七節「この時からイエスは教えを宣べはじめて言われた、「悔い改めよ、天国は近づいた。」」というマタイの「御国の福音」を検討する必要がある。何故なら、マルコ一章一四-一五節「ヨハネが捕えられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた。「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ。」とマタイ四章一七節を比較すると、「神の福音」、「時は満ちた」、「福音を信ぜよ」が省略されて、「悔い改めよ、天国は近づいた」ということで十分であると考えているのである。つまりマタイにとって「福音」とは「御国の福音」ということ、「天国は近づいた」ということである。そのマタイが四章二三節において(その平行である九章三五節も)、マルコ一章三九節に即しながらも、そこにない「御国の福音を宣べ伝え」を挿入しているのである。なぜそうしたのか、マタイの意図が問題となるところであるからだ。

塚本虎二の四章二三-二五節についての解釈は、五-九章を視野に入れた「イエスの伝道の総括」であると言う。即ち、「マタイは五-七章においてイエスの説いた御国の福音について詳説し、続いて八-九章においてイエスの行った^{いや}医しの業について詳しく述べているが、それに先立ってここにイエスの伝道についての総括的な言葉を記している。すなわちイエスの活動はガリラヤにおける巡回伝道であって、ガリラヤ中を回りながら礼拝堂で教え、福音を説き、また病気を医し、悪鬼を追い出されたのである。さらにマタイはその結果としてイエスの評判が広まり、民衆が群り集まったという。」²⁾と。そして「このような総括的な記事にはマルコに対応するものがある」³⁾

としてマルコ一39、同一34、同一28、そして同三7－8を指示している。さらに塚本は、「福音宣伝」と「教え」と「医しの業」との関係について、次のように理解する。「イエスに取りては、舌による福音の宣伝〔教え〕は極めて軽小なる地位を占むるに過ぎなかった。より重要な彼の福音宣伝は彼の愛の事業であった。洗礼者ヨハネが彼に躰かんとして二人の弟子を遣わしたときに、「盲人は見えるようになり、足なえは歩きまわり、癩病人は清まり、聾は聞き、死人は生きかえり」と答えられたそのことであった。病人を医し、死人を活かし、暴風雨を静めた彼の能力ある業と不思議と徴とであった。しかしながら、真の意味の彼の福音宣伝、彼が地上に来られた最後の目的たる福音宣伝は、説教でもなく、事業でもなく、それは彼の生活、忍従の生活それ自身、否、十字架上に汚辱の死を死なれたそのことであった。他のすべてのものは要するにこの十字架上の死への準備に過ぎなかった」⁴⁾と。この真の意味のイエスの福音宣伝は「十字架上の死」であったとは、マタイの「御国の福音」である。イエスの活動（教えと医し）の終るところ（そこからイエスの活動の分岐してくるところ）に実在する「御国」に関わることである。即ち「悔い改めよ、天国は近づいた」（四17）とは、つまりその「近づいた」とは、近づきつつあり、ではない。近くに来ている、既に近くに来てしまっている、の意である。既に神の国は戸の外まで来ているから、寸時も早く悔改めて福音を信じ、神の国に入れ、と言われたのである⁵⁾と。或いは、「福音の何んであるかをイエスは説明しなかった。しかし、それは説明を必要としなかった。イエスが来られたこと、神の国が来臨したこと、そのことが福音であった。神の国が来たから、悔改めてこれに入れ、というのが福音であった。そして、この「福音を信ぜよ」がガリラヤ伝道の基調であり、総約であった。すなわち、ヨハネのメシヤは審判のために来るのに反して、イエスによるメシヤは福音を信ぜしめんため、悔改めて神の国に入らしめんがために来るのであった」⁶⁾と。

それにしても、神の国＝天国について、福音書において、「天の国を未来とするもの」と「既に来れりとするもの」、即ち「二つの全然相反対すると見える考え」があるが、塚本虎二はさらにこの点を問題にし、二つの天国観が同時に出てくるヨハネ五章24－29節に即してその点を次の如く解明する。「第一、第二とともに、福音書全体に亙りてその思想を見出すことが出来るが故に、一々例示に堪えない。ただ第一の例〔未来のもの〕として最も顕著なるものは主の祈り第二の「お国が来ますように」（マタイ六10）、あるいは「ああ幸いだ」（同五3－9）、あるいは不埒な裁判官の譬である（ルカ一八1－8）。天の国に関することが未来動詞をもって書かれている例は夥しい（マタイ八11、一三43、二六29等々）。次に天の国は既に来れりとする考えは、例えば、ナザレの礼拝堂におけるイエスの最初の説教（ルカ四19－21）、あるいは「神

の国はもうあなたたちのところに来ているのである」とのイエスの言（マタイ一二28）、その他枚挙に遑なし（例えば、ルカ五34、七20、一〇18-19、23、一六16等々）。この一見矛盾せる二つの考えを最も明瞭に書いたものがヨハネ五章24-29節である。「24アーメン、アーメン、わたしは言う、わたしの言葉を聞き、わたしを遣わされた方を信ずる者は、今すでに永遠の命を持っていて、最後の日に罰を受けない。その人はもはや死から命に移っているのである。25アーメン、アーメン、わたしは言う、死人が一人のこらず神の子わたしの声を聞く時が来る、いや、今もう来ている。しかしただ聞くばかりでなく、ほんとうに聞き従う者だけが生きる。26父上は御自分で命を持っておられるように、子たるわたしにも自分で命を持つことを許し、27かつ、裁きをする全権を子にお授けになった。人の子であるわたしは、人間の心がわかるからである。28あなた達は子が裁くというこのことを驚くに及ばない。時が来ると、墓の中にいる者が皆子たるわたしの声を聞いて、29墓から出てくるからである。すなわち、善いことをした者は永遠の命にはいるために復活し、悪いことをした者は死の罰をうけるために復活する。」すなわち27節までは神の国の既来を言い、次の二節は未来をいうのである。ヨハネの意味はこうである——神の国は既に来ている。キリストを信ずる者は、既に永遠の命を有^もっており、既に死より命に移っている。しかしいまに完全なる神の国が実現する、そのとき善人は命への甦^{よみがえ}りへ、悪人は滅亡への審判へと墓から出て来るであろう、と。神の国はキリストと共に来ている。しかしそれは見えざるものであり、ここにあり、かしこにありということの出来ぬものである。しかしついに最後の日においては目に見ゆる形をもって神の国が実現する。我らキリストを信ずる者は、このまま最後の日まで信仰を持ち続けるならば必ず神の国に入るであろう。しかし不信なる者はもし悔改めずば、ついに審かれて、永遠の滅亡に入る。これがヨハネの考えである。ここにおいて、キリストが神の国をあるいは現在の如く、あるいは未来の如く言われた理由は明白である。イエスの来臨によりて神の国は既に来た。しかし完全な神の国の来臨、実現は最後の日であるというのである。』⁷⁾と。結局のところ、「イエスはかかる神の国の来臨を宣べ伝え、悔改めてこれに入るべきことを勧められた。いまに神の国が来るであろうから悔改めてこれに入るべき準備をせよ、ではなかった（それは洗礼者の宣伝であった）。「もう既に来ている、だから早く信じてこれに入れ」であった（マタイ一十二-13を読め）。信じた瞬間から神の国の一員となり、永遠の命に入ることが出来るのである。だから福音である。この意味ではキリスト教は未来教ではなくして現在教である』⁸⁾と。

最後に塚本虎二の、「イエスの活動の総括」（四23）と五-九章との関係、つまりマタイ福音書の構成についての考察を、その「第二六講 権威ある教え——マルコ一章

21-28節（ルカ四31-37）——」の解釈に即して検討する。「これはマルコにおける最初の奇蹟物語であるが、イエスの奇蹟行為がイエスの教えと結びつけられており、権威を持つ者のように教えられるイエスは事実権威をもって悪霊を圧服されたのである。マタイはこの記事を欠くが、イエスの山上の説教の終りに「イエスがこれらの話を終えられた時、群衆はその教えに感心してしまった。自分たちの聖書学者のようではなく、権威を持つ者のように教えられたからである」（七28-29）とあって、全くマルコに対応している。さらにその権威を裏付けるイエスの奇蹟行為についてはマタイは八-九章にわたってそれを詳しく展開しているのである。」⁹⁾「このカペナウム礼拝堂における出来事は、マルコとルカのみあって、マタイには無い。何故にマタイがこれを省略したのか理由は判らない。とにかく、マタイにおいては、このカペナウム礼拝堂の記事を欠き、それに当るべき場所に、五-七章の長きに亙る有名なる山上の説教がある。……しかしてマタイにては、山上の説教の直後に、十個の奇蹟を掲げ、言葉による伝道に対して、業^{わざ}による伝道を誌している。故に、マルコとマタイを比較するならば、マルコのこのカペナウムの礼拝堂の記事は、マタイの五-七章の山上の説教と、八-九章の奇蹟集に当るもの、すなわち、マタイが両者を対立して集録したると同一の精神〔註 マタイは編集を好む。五-七章は説話集、八-九章は奇蹟集、一三、二五章は譬集である。〕を示す記事であるということが出来る。詳しく言えば、この安息日における出来事は、イエスの言葉による伝道と、その業による伝道とがいかなるものであり、この二つがいかなる関係に立つかを示すものである」¹⁰⁾と、塚本虎二は、「イエスの活動の要約」（四23）と五-九章の編集構成との関係を、マルコの最初の奇蹟物語（一21-28）を踏えたものであり、「マタイは編集を好む」ということにその構成の意図を見出ししている。もっとも何故にマタイが、ルカにもあるこのマルコの最初の奇蹟物語を「省略したのかの理由は判らない」と塚本虎二は付言しているのであるが。

さらに塚本虎二は、マルコのこのカペナウム礼拝堂における出来事に出てくる「権威」の何んであるかを追求している。このことは、「教え」と「医し」と「御国の福音」との関係をもどのように考えているかを明らかにするものである。それを検討する。「このカペナウム礼拝堂の出来事は、我らにイエスの権威の何んであるかを示すものである。すなわち、彼の教えに権威があったのも、彼が悪霊を追い出されたのも、要するに両者全く同一であって、共に同じ本源より発するものであることを示すものである。……それならば、どこにその権威の源泉があったか。いうまでもなく、それはイエス彼自身にあった。すなわち、悪霊に命じて、これを追い出す能力が彼にあったからである。地上のすべての力を制御する権威を有たれたからである」¹¹⁾。す

なわち、「イエスには、「罪を赦す^{ゆる}権威」があったからである。しかし、中風を癒すことは、罪を赦すことに較べては、もちろん極めて易々^いたることであったからである。神の子キリストは罪を知らなかった。彼は神の如く完全であり、愛それ自身であり、義それ自身であられた。彼の道徳的完全さ——彼に人の罪を赦し得る能力があったこと——そのことが、発しては病気の治癒となり、死人の復活となり、また凝^こっては、山上の説教において見る如き偉大なる説話となったのである。「いまわたしがあなた達に話した言葉は、霊である」（ヨハネ六63）とイエスは言われる。ヨハネが、「この方（ロゴス）は命をもち、この命が人の光であった」（一4）というもまたこの故である。イエスに在りては、言は単なる言語ではなかった。それは、命それ自身であった。神よりの命であった¹²⁾と。従って塚本虎二は「教え」と「医し」と「御国の福音」との関係を次の如くに語る。「イエスの伝道はこれを宣教と病気の治癒とに二分することが出来る。前者は光の何んであるかを説示することであり、後者は命の施与である。前者は真理なるキリストの顕示であり、後者は命なるキリストの提供である。前者は「先生」としてであり、後者は「医師」としてである。しかし、この点においても彼と預言者とは類似する。ただし、その主要なる差異は、預言は「神の声」であって神意、真理の啓示伝達が主であって、奇蹟をもって病人を治癒し、死人を甦らすという如きはむしろ例外であるに反して、イエスの場合においては——彼においても奇蹟はただ例外として行われたのであるけれども——命の施与がむしろ彼の本来の使命であった。彼は真理であると同時に命であり、また命への「道」であったからである（ヨハネ一4を心読せよ）。イエスの伝道にこの二面があった。二面といっても、もちろんこれは同一生命の二つの異なる現われ方である。ただ我らは、彼を真理の先生とのみ見て、命の医師たることを忘れ勝ちである¹³⁾と。かくて塚本虎二は「イエスの活動の要約」（マタイ四23-25）において、宣教と病気の治癒とは、同一の生命・イエス自身・罪を赦す権威の二つの異なる現れ方であり、どちらも大切であり、不可欠ではあるが、どちらかという「命の施与がむしろ彼の本来の使命である」として、四24において医^{いや}しが強調されており、その故に四25において、「おびたしい群衆がきてイエスに従った」ということの原因を説明している。

——我々は塚本虎二の「イエスの伝道の総括」（マタイ四23-25）の独創的な解釈を、しかもイエスの福音宣教の要約である「悔い改めよ、天国は近づいた。」（マタイ四17）の精確な解釈と結びついたそれを聞いた。それによって「諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった」と、マタイがマルコの「諸会堂で教を宣べ伝え、また悪霊を追い出された。」（一39）

を踏まえながらもあえてそこに「御国の福音を宣べ伝え」を挿入した理由を理解できるようになった。つまり「御国の福音」＝「神の国」[「天国は近づいた」とは「近づきつつあり、ではない。近くに来ている、既に近くに来てしまっている。の意である。」¹⁴⁾「もう既に来ている、だから早く信じてこれに入れ」であった。信じた瞬間から神の国の一員となり、永遠の命に入ることが出来るのである。だから福音である。¹⁵⁾の「二つの異なる現れ」・「共に同じ本源より発するもの」である故に、「教え」と「医し」とは「福音」＝「天国」の現われであり、前二者と後者とは次元を異にするものであるからである。ところが塚本虎二は、マタイの「五―九章」の構成理由がわからないと言われるのである。一応マタイがマルコ一章21―28節に基づいてつまりそこにはイエスの教えと悪霊につかれた人の癒しが出てきているのでそれに基づいて、「マタイは編集を好む」ということで五―七章と八―九章とを編集構成しているとされている。しかし、このマルコ一章21―28節は、「マタイには無い。何故にマタイがこれを省略したのか理由は判らない」と塚本虎二は言う。つまりマルコにおけるイエスの最初の活動「会堂での教えとそこでの悪霊につかれた人の癒し」をマタイは落しているのであるから、マタイがそれでは歴史のイエスを精確に再構成することができない、そのためにはまずイエスの教え（五―七章）を先立て、その後イエスの癒しの業（八―九章）を位置づけなければならないとしたその理由が問題とならざるをえない。従って塚本虎二は「マタイは編集を好む」ということで一応五―九章の構成を説明されるのであるが、つまるところマタイが「五―九章」を構成した理由が解らないということになる。従って、何故に塚本虎二は、マタイの「五―九章」の編集意図・理由が判らないのかを、まず批評する。

塚本虎二は「イエスの伝道にこの二面〔宣教と病気の治癒〕があった。二面と云いても、もちろんこれは同一生命の二つの異なる現れ方である。」「イエスの場合においては――彼においても奇蹟はただ例外として行われたのであるけれども――命の施与がむしろ彼の本来の使命であった。彼は真理であると同時に命であり、また命への「道」であったからである。」¹⁶⁾といわれているが、結局のところ、なるほど「永遠の生命」＝「神の国」の「二つの異なる現れ方」であり、等価であり、共に不可欠であると言われているが、その二つの現われの「秩序・順序」については不明である。「命の施与がむしろ彼の本来の使命であった」と「真理の啓示伝達が主」ではなかったと一応云われているが、それはイエスの活動の要約〔マタイ四23―25〕において二四節に「おびたしい群衆がきてイエスに従った」理由として「病気の治癒」が強調されていることに基づいている判断にすぎず、二つの現われの事柄そのものの秩序ではない。また「イエスの場合においても奇蹟はただ例外として行われたのであるけれど

も——命の施与がむしろ彼の本来の使命であった」と言われていることに関しても、「誘惑物語」（マタイ四1-11）に我々は見たように悪魔の誘惑による奇蹟をどこまでも拒否されて、「神の言葉」にどこまでも従順であった「神の子」（マタイ三17）イエスが提示されていた。もっとも「神の言葉」にどこまでも従順であることでは厳密に即事的でないこと、どこまでも「神の言葉」が出てくる「神の口」＝「子の神キリスト」に従順であるということ、それがイエスが「神の子」と神よりたえられた理由であったが。従ってそこでも「子の神・キリスト」＝「神の口」の二つの現われに於ける秩序が言われていた。「神の言葉」（イエスの宣教）が事柄として先であり、つまり「神の国」が真実に存在することを証することが先であり、奇蹟行為は、悪魔の誘惑による奇蹟でない限り、つまり「子の神・キリスト」＝「神の国」に基づくものである限り、「神の言葉」——神の国が真実に存在することの証言——への従順の後のものでなければならないことを見た。従って塚本虎二の説明では、「二つの異なった同一生命の現れ」の現われにおける秩序は究明されていないといわざるをえない。

その場合の根本的問題は塚本虎二のキリスト論にある。何故ならば、塚本虎二は「カペナウム礼拝堂の出来事（マルコ一21-28）におけるイエスの権威を問題にして次の様に言われるからである。「彼の教えに権威があったのも、彼が悪霊を追い出されたのも、要するに両者全く同一であって、共に同じ本源より発するものであることを示すものである。」¹⁷⁾そしてこの権威の「本源」は「イエス彼自身であった。」即ち「神の子キリストは罪を知らなかった。彼は神の如くに完全であり、愛それ自身であり、義それ自身であられた。彼の道徳的完全さ——彼に人の罪を赦し得る能力があったこと——そのことが発しては病気の治癒となり、死人の復活となり、また凝っては山上の説教において見る如き偉大なる説話となった」¹⁸⁾とされているからである。このキリスト論では、塚本虎二がイエスは我々と全く同じ人間・「無学の素人（行伝四13）」¹⁹⁾であると言われてもこの「まことの人」は「土のちり」から創造された被造物とすることができようか。また、「彼は真理であると同時に命であり、また命への「道」であった」²⁰⁾とも言われているが、「命への道」であるとは、人イエスの活動（教えといや医し）が断たれるところ、人が土のちりにすぎないということがいやが上にも明確になるところ、そこに「子の神・キリスト」＝「神の国」が実在するから、「子の神・キリスト」が「父なる神」を信ずる「道（方法）」となるのである。つまりところ塚本虎二が「本源はイエス彼自身にある」²¹⁾といわれるイエスのベルソナの分析が不十分であるからである。イエスが「まことの人」であると言えるのは、そのイエスが「子なる神・キリスト」という絶対的限界（土のちりにすぎない）においてあり、そこに実在する「子の神・キリスト」を完全に映し出された人である。この意味でイエスは

「まことの神」・「神の子」であると言うことができるのである。かくして、「子の神・キリスト」に於て、父なる神によって創造され・保存されている人間に、精神（神の似姿）とからだという秩序が成立するのである。従ってイエスの活動も「子の神・キリスト」に基づいて、精神的活動（神の言葉・教え）と身体的活動（病気の癒し・奇蹟）という秩序ある活動に分岐せざるをえないのである。かくしてマタイがマルコに拠りながらも、歴史のイエスを精確に再構成するためには、マルコ（一21-28）——そこにはイエスの教とイエスの癒しの行為とが同時に出てきている——では十分ではないとして、それを落して、新たに「山上の垂訓」を先にして、「奇蹟物語」を後におくことによって歴史のイエスを厳密に・即事的に再構成したのである。マルコよりも、マタイの「視点」が明確であり、それがインマヌエルの原事実・「子の神・キリスト」に置かれていたので、そういう構成（五-九章）が可能になったのである。

次に塚本虎二の贖罪思想を問題としたい。「キリスト教の唯一真個の使命は、罪との戦いにおいてある。アダムをもって始まる人類の罪の根元を、断ち切ることにある。従って、その中心真理は、イエスの十字架においてある。十字架の贖い、これがキリスト教の存在理由である」²²⁾といわれるそれを、塚本虎二もそうされている如く、「イエスの伝道の総括」（マタイ四23-25）に即して問題にしたい。「真の意味の彼の福音宣伝、彼が地上に来られた最後の目的たる福音宣伝は、説教〔教え・山上の垂訓〕でもなく、事業〔愛の事業・癒しの業〕でもなく、それは実に彼の生活、忍従の生活それ自身、否、十字架上に汚辱の死を死なれたそのことであつた。他のすべてのものは、要するにこの十字架上の死への準備に過ぎなかつた。彼にありては伝道とは、ただ十字架を負うて死ぬることであつた。」²³⁾と塚本虎二は解釈されるのであるが、そのことはイエスの全宣教活動の要約である「悔い改めよ。天国は近づいた。」（マタイ四17）と矛盾しているからである。塚本虎二が「十字架の死」を「神の子・キリスト」の死であるから、つまり「イエスには、「罪を赦す権威」があつた。神の子キリストは罪を知らなかつた。彼は神の如く完全であり、愛それ自身であり、義それ自身であられた」²⁴⁾そのイエスが十字架で死なれたのであるから、神が・「イエス・キリスト」が、人間に代わつて、その罪による死を引き受けて、その死を死んでくれた。そのイエス・キリストの十字架の死によって、人間は罪による死から救われた・贖われた、と解釈されたのであろう。しかし、このような解釈では、イエスの宣教活動の核心である「悔改めよ、天国は近づいた」とはつまり「既に近くに来てしまつている」²⁵⁾神の国、「神の国はキリストと共に来ている」²⁶⁾という「神の国」とは結びつきようはない。イエスの宣教活動の核心は「御国の福音」であり、決して「十字架の死」ではない。従つて、「イエスの十字架の死」とは、イエスの宣教活動（説教と癒しの業）

が終息することである。「イエスは罪を赦す権威・能力を持っておられる。神の子・キリストである」というそのような能力や権威や神の子というものが断たれる、イエスについて絶望であるということである。しかしながらそこに於て人イエス・十字架上のイエスと「一つである」「神の国」が、人イエスがそれに抛って生き・死にされた「子の神・キリスト」が、要するに「インマヌエルの原事実」がいやが上にも明らかにならざるをえない。この意味で「イエスの十字架の死」は、神による「子の神・キリスト」＝「神の国」の啓示であるのである。

従って塚本虎二の「悔い改めよ、天国は近づいた」の解釈も問題とならざるをえない。「神の国は既に近くに来てしまっている」「既に神の国は戸の外まで来ている」「神の国はキリストと共に来ている」と言われているが、さらに「どこに来ていいのか」（塚本氏の言われる、「近くに」或は「戸の外」とはどこなのか、「キリストと共に」とはキリストのどこになのか）を問わなければならない。イエス・キリスト或は人イエスの一切の能力・権威、一切の活動の断たれるところ、その意味でイエス・キリスト或は人イエスが「土のちり」に還えるところ、そこに既に、太初から「神の国」・「子の神・キリスト」が「父なる神」から派遣されて来ておられる、真実に実在する、「神われらと共にいます」のである。「神の国はキリストと共に来ている」のではなく、イエス・キリスト・神の子・人イエスが十字架に架けられて断たれるところに〔この意味で、時間・空間も落ちてしまうところに・終末に〕、人イエス・神の子キリストが「土のちり」に還えるところに〔人は、父なる神によって、「子の神・キリスト」に於て、土のちりより造られた姿形に命の息を吹き込まれて、精神とからだという秩序あるものとして創造され・保存されているのであるが、その原事実に戻るところに〕、「神の国」＝「子の神・キリスト」は世の太初から、既にすでに来ておられるのである。この「インマヌエルの原事実」の下で、その内で、アダムが「共にいます神」を、人間の絶対的限界である「子の神・キリスト」を無視しようとしたのである。真実に実在する「共にいます神」・「子の神・キリスト」を、アダムが無視しよう、神にとって変わろうとしたのであるから、理由も根拠もないことであるから、悪魔による誘惑にひっかかったということであり、それにもかかわらず「共にいます神」「子の神・キリスト」は依然として真実に実在するのである。

五

続いて、E・シュヴァイツァーの「イエスの活動（教え、かついやすメシア）の要約（四章23-25節）」についての解釈を、彼の『マタイによる福音書 翻訳と註解』²⁷⁾

に拠って検討することにする。

E・シュヴァイツァーは、四章23-24節を「教え、かついやすメシア」と標題を付けている。即ち「五-七章および八-九章ではメシアの言葉と行為とが並べられているが、同じことはすでにこの総括的な導入の言葉にみられる。その中23節は九章35節で繰り返されている。マタイによって作られたこの概観は、23節では強度にマルコ福音書一章39節を、24節ではマルコ福音書一章28、34節を、25節では三章7-8節を思いおこさせる。」²⁸⁾と。マタイは23節をマルコ一章39節に基づいているが、マルコにない「御国の喜びの福音を宣べ伝え」を挿入している。この「御国の福音」が添加されていることによって、シュヴァイツァーは、この普通「イエスの活動の要約」と名づけられるところを「教えかついやすメシア」と名づけているのだ。従って、このことを理解するために、我々は、シュヴァイツァーの「悔い改めよ、神の国は近づいた」(四17)についての解釈を、しかもそれはマタイがマルコの「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」²⁹⁾(一15)に拠りながらもそれを変更しているのでそれも考慮した彼の解釈を見る必要がある。即ち「マタイはイエスの活動の始めについてのマルコの報告を取り入れているが、それは山上の説教の中で特別の聴衆群として出る弟子たちの召命が、山上の説教よりも前に物語られなければならないからである。しかし、そこには特徴のある変改が施されているのを確認できる。先ず、マタイはイエスの悔い改めへの呼びかけを「そのときから」という彼に独自の言いまわしで、15-16節での引用句に結びつけている。つまり、イエスの宣教において暗闇の中に座っている人たちに対する光がきらめく、というのである。このことは、イエスによって宣べ伝えられる言葉は洗礼者のそれと言葉通り同じであっても、もはや先駆者ではなく、成就者が語っている、ということを示している。[シュヴァイツァーは、洗礼者の場合「天国は近づいた」とし、イエスの場合は「神の国は近づいた」と同じ表現を区別している。]マルコに二重に出る福音を指す言葉が欠けているという点は、神学的に重要である(七15-23に対する付説3を見よ)。」³⁰⁾と。つまり「神の国は近づいた」とは、「イエスの宣教において暗闇の中に座っている人たちに対する光がきらめく」ということ、成就者イエスの、地上のイエスの宣教活動において、「神の国」・「光」・「メシア」が実現・成就している、到来している、ということである。なおマタイがマルコのイエスの宣教の要点(一15)から「福音」という言葉も除いているという点は、マタイの「福音」の理解のマルコのそれと異なっていることを示していることについてシュヴァイツァーは次の如く指摘する。「ただ、聖書が今やイエスの指示と振る舞いとはつきり新しい光の中に歩み入ったという点は、全く明白である(五17-20および二八18-20の註解を参照)。それゆえにここで [[わたしに、主

よ、主よというものすべてが天国に入るのではなく、わたしの父の意志を行うものが入るのである（七章13-23節「弟子たることを脅かす危険」）問題になっているのは、イエス自身の奉仕とイエスの指示から解きほどかれた野育ちの熱狂主義ではありえない。この点マタイが、マルコにある「福音」という表現の代りに二度「(神の) 国の福音」と述べているという事実で明らかである（四23と九35。これらの箇所は、イエスの新しい教えをあらゆる山上の説教と、苦しんでいる人たちに対するイエスの全振る舞いをあらゆる奇跡行為とに対する枠の部分にある）。彼は二度「この（神の国の）福音」とつけ加えており（二四14、二六13）、つまり地上のイエスにより宣教された福音から分離できるような福音は存しないということをはっきり鮮明にしようとしている。また彼は二度「福音」という語を全く省略し、その結果今や、イエスからいわば分離しつつある「福音」ではなく、ただイエス自身、あるいは彼の名前だけがふりかえって指示されるようにしている（一六25 [マルコで「わたしのため、また福音のために命を失う…」とあるのをマタイは「わたしのために命を失う…」と、「福音のため」を削っている]、一九29 [マルコで「わたしのため、また福音のために…」とあるのをマタイは「わたしの名のために…」と、「福音のために」を削っている。])。要するにマタイは、イエスの名前において行なわれるが、もはや地上のイエスの誠命や全生活について知らない、復活の出来事以後の宣教に対して、非常に批判的な立場をとっているのである（七28-29の註解を参照）。³¹⁾と。またシュヴァイツァーは、「結びの言葉 七章28-29節」の註解において、同じことを指摘している。「このことの[マタイにおける「結びの言葉」の位置に関して]の背後には、マルコにおけると全くちがう神学的理解がある。マルコはその読者たちに向って、イエスにおいて権能にみちた神の言葉は再び現実となったと、その点についての証拠を最初にあげることをせずに「宣教する」。それは彼にとって、簡単に後から検査することのできない、信仰の証言である。これに対しマタイは、先ず山上の説教全体を紹介し、その後で始めて、イエスの教えの権能について語る。つまり、彼は信仰についてのこの判断を、読者が今や判断することのできる内容によって基礎づける。この点に、彼が「福音」という概念を用いるに際してすでに認められたことが、再び明らかになる。七章13-23節に対する付説3を参照。マタイは、イエス・キリストにおいて世に対する言葉が語られた、人間に対する神の力と恵みとが始まったと宣言はするが、しかし、それをもはやはっきりと地上のイエスの説教と活動とに結びつけることをしない復活の出来事以後の福音宣教に対して懐疑的である。イエスが神の権能をもって語ったという点は、単に宣教され、信じられるべきではなく、耳をそばだてて聞かれ、行われなければならないのである。³²⁾と。つまり「地上のイエスの説教と活動」とが、「神の国」・「光」・

「メシア」の地上における実現であり、到来であり、「イエスにおいて権能にみちた神の言葉は再び現実となった」とマルコは証拠をあげずに「宣教する」のは「地上のイエス」から、つまりメシアであり、神の国であるイエスから分離された「福音」理解に道を開くことになるとマタイは危惧しているのである、と。

かくして、シュヴァイツァーの「教え、かついやすメシア 四章23-25節」の解釈は次の如くである。23節について。「マルコ福音書一章39節からマタイは先ずもう一度、彼にとって重要なガリラヤという土地の指定をとり入れる。しかし、マルコをこえて、イエスがめぐり歩いたことが強調される。これは、ユダヤ教の預言者や教師に関して、ほかでは報告のない事柄である。マルコは、彼は「彼らの会堂で宣べ伝え」と報告しているが、マタイは「彼らの会堂で教え」と「御国の福音の宣教」（七13-23に対する付説3を見よ）とを区別しているように見える。彼は、イエスは始めは「彼らの会堂で礼拝に集まったイスラエルを教え、その後になって始めて「通りで」（二二9-10）彼の特別の使信を宣教する、と言おうとしているのであろうか。マタイでは「教え」は会堂、律法、倫理的勧告と関係しており、「宣教」は福音および神の国と関係している。それゆえに彼は一三章1-3節でたとえをもはやマルコ福音書四章1-2節のように「教え」とは呼ばない。内容の報告のあるイエスの説話はどれ一つとしてある会堂または家に位置づけられていない³³⁾と。24節について。「シリアが言及されているのは奇妙である。おそらくそれはこの福音書記者の故郷であろう。なお、この節の内容は総じてマルコ福音書一章28節、34節と一致している。病気および困難についてのこの長い目録は、マタイは自分がイエスの活動のこの側面を決して過小評価したのではないとうけとられることを望んでいることを明らかにしている。実際彼は八-九章でこの点に立ち戻る。」25節について。「25節は総じてマルコ福音書三章7-8節に対応する。マタイは悪霊どもの神の子に対する告白の報告（マルコ三11）を省略しているが、それは理解できる。悪霊どもではなく、イエスに従う用意のある弟子たちがイエスにおいて神の子を認めるのである（一四33、一六16）。」かくて、シュヴァイツァーは「教え、かついやすメシア 四章23-25節」を次のように総括する。「それでは、イエスを言葉と行為に総括して紹介するに先立って、何がマタイにとって重要なものとして残っているのか。それは、誰も期待しなかったであろう——そして神が彼を多くの回り道を経た上でそこへ導いた——「異邦人のガリラヤ」における彼の活動であり、後に従うこと、つまり宣教とカリスマ的な救援という形でイエスにふさわしく生きることへの招きである。それは、山上の説教で説明されている御国の福音の告知であり、イエスの力強い行為の報告集で展開されている、神の力による治癒である。それは、ガリラヤをこえ、福音書記者およびその本を読む（？）

教会の故郷にまでおよぶ、イエスの力強い働きである。』³⁴⁾と。

最後にシュヴァイツァーが、「彼らの会堂で教え」と「民の中のすべての病気とすべての弱さとをいやした」とが、共にメシアの働きとして、「御国の喜びの福音を宣べ伝え」の二つの現われであることを見たわけであるが、換言すればシュヴァイツァーは四章23節について「教え」と「癒しの業」つまり地上のイエスの活動こそ「御国の福音」にほかならないとマタイが考えているので、両者の真中に「御国の福音」を挿入していると解釈しているのであるが、この二つの現れ、「教えるメシア」と「いやすメシア」との秩序・順序をどのように考えているか、五―七章と八―九章の構成の秩序順序についてどのように考えているかについて見ることにする。「イエスの活動の開始、その説教、弟子たちの召命を叙述するに際しては（四17―22）、マタイは、三章1節以来してきたように、まだマルコに従っている。もっとも、彼はそれをQによって拡大し、また彼にとって重要な三章14―15節、四章13―16節のような言葉をそれに付加している。一―二章1節以下では、彼は再びマルコの糸に従う。注目に値するのは、このことが五―一―章で行われていないことである。ところで、マタイが五―七章でイエスを言葉のメシアとして、八―九章では行為のメシアとして叙述しようとしていることは明白である。四章23節はそれゆえ九章35節で言葉通りくりかえされ、つまりこの二重構造を包むしっかりとした枠を形成している。……Qでは平野の教え（または山上の説教）が終わったところで、カペナウムの百卒長の物語（マタ八5―13＝ルカ七110）、および洗礼者の質問（マタイ一―2―5＝ルカ七18―23）が続いている。洗礼者の質問では、イエスはそれに対する答えの中で、奇跡を指し示している。それゆえにマタイは奇跡を八―九章に集めたのであった。』³⁵⁾と。要するにシュヴァイツァーは、五―一―章はマルコに従っていない、五―七章と八―九章とは二重構造をなしているが、それぞれはQにある平野の教えとQにあるカペナウムの百卒長の物語と洗礼者の質問に基づいておると指摘するのみで、肝腎の二重構造の秩序・順序については触れていないのである。

——我々は、E・シュヴァイツァーの「教え、かついやすメシア 四章23―25節」についての解釈を、それと不可分の関係にある四章17節の「悔い改めよ、神の国は近づいた。」の解釈とともに、詳しく聞いた。彼の独創的で綿密な解釈の批評を試みることにする。まず最後に触れた「五―九章」の二重構造の「秩序・順序」の問題をとりあげる。シュヴァイツァーは、四24のいやしの業に関する長い目録について、それはマタイがイエスの活動（行為のメシア）のこの側面を過少評価しているのではないことを示していると、いいつつ、マタイが八―九章でそれを述べる前に、四章の初めの

誘惑物語（悪魔の誘惑による奇跡の拒否、どこまでも神の言葉に従う神の子イエス）、そして弟子の選択を置いて、イエスの活動の要約（言葉と行為による福音宣教）、そして山上の垂訓（神の言葉）、その後に奇跡物語（神の行為）が置かれているのである。従って、マタイ福音書の構成からも、「神の言葉」である山上の説教が先に来なければ「神の行為（悪魔のそれではない）」である奇跡が精確に理解されないことは明白であるのではなかろうか。また歴史のイエス或はイエス・キリストを精確に再構成するためには、「言葉のメシア」と「行為のメシア」とを同時に別々の側面として描き出せばよいとしても、マタイは「言葉のメシア」の方を先にし、「いやしのメシア」を後に、神の言葉を先に神の行為を後に描き出しているのである。そこにマタイが歴史のイエス・「イエス・キリスト」を再構成するに際してのマタイの視点と方法がどうしても問題とならざるをえないのではないか。「御国の福音」（神の国＝子の神・キリスト）に「視点」を置くことにおいて成り立っている歴史のイエス・「イエス・キリスト」を再構成するのに、その「御国の福音」の直接的反映である精神的側面・神の言葉の側面を先に取りあげ、その「御国の福音」の間接的反映である身体的側面・神の行為の側面を後に取りあげる様にするということは方法として問題になるのではなかろうか。シュヴァイツァーの言うどちらもメシアの働きの、「御国の福音」の現われとして大切な言葉と行為の二重構造の中に「秩序・順序」があるのではないか。マタイは、「イエス・キリスト」を精確に再構成するために「御国の福音」に視点をおいているので、その事柄そのものの中に含まれている「秩序・順序」に気づいていたのではないか。従って、シュヴァイツァーの解釈では、マタイの「視点」の問題も、二重構造に含まれている「秩序」についても、また少くとも四章の初めから九章に至るマタイの構成についても十分に説明されていないのではないか。このような問題がシュヴァイツァーに明らかにならないのは、彼が「地上のイエス」という曖昧な言葉を使っているからであり、さらに四章23節の解釈において「地上のイエスの活動」つまり「教え」と「癒しの業」こそ「福音」にはほかならない、「福音」とは地上のイエスの活動以外にない、それから分離されてはならないと考えているからである。従ってシュヴァイツァーが「地上のイエスの説教と活動に結びつけることをしない復活の出来事以後の福音宣教に対して〔マタイは〕懐疑的である」と解するのも以上のことと関係することであり、根拠のない解釈ということである。

次にシュヴァイツァーのマタイの「御国の福音」理解について問題としたい。マタイ福音書における重要な「ペテロの信仰告白」と「イエス、死と復活を予告する」（一六13-27）に於ける一六章25節において、その平行記事であるマルコ八章35節にある「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分

の命を失う者は、それを救うであろう」とあるテキストからマタイは「また福音のために」を削除している。このことは「その結果今や、イエスからいわば分離しつつある「福音」ではなく、ただイエス自身、あるいは彼の名前だけがふりかえって指示されるようにしている」³⁶⁾のである、とシュヴァイツァーは解釈する。つまり「地上のイエスの誠命や全生活」を、すなわち「メシアの言葉と行為」（五―七章、八―九章）を「御国の福音」ということで理解しているということである。それは、シュヴァイツァーが「悔い改めよ、天国は近づいた」というイエスの宣教活動の要点の解釈において、地上に「神の国」が実現・成就した、「キリスト」が地上に出現した、と解釈していることから、「メシアの言葉と行為」こそ「御国の福音」そのものであると解釈するに至っているのである。しかしながら、ここでもシュヴァイツァーの「わたしのため、また福音のため」という時の「わたし」について、また「御国の福音」という時のその「御国の福音」について、分析が足りないのである。「わたし」或は「御国の福音」という場合、メシアとして現れたこと、御国として現われたことを意味しており、そのメシア・御国の現れが、言葉と行為として分岐して現われていると解しているが、マタイの場合、「インマヌエルの原事実」が、メシアとして現われたこと、御国として現われたことの背後にあるのである。その「インマヌエルの原事実」は地上のイエス・人間イエスから離れてあるのではなく、地上のイエス・人間イエスの生と死の拠り所であるのである。その限り「インマヌエルの原事実」は「地上のイエスの言葉と行為」を超えたものとしてあり、「地上のイエスの言葉と行為」を成立させる・生成させる源泉である。「インマヌエルの原事実」こそ「御国の福音」の源泉である「御国そのもの」「原福音」であるのである。マタイ福音書の「神われわれと共にいます」（一23）と「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」（二八20）とはマタイ福音書の大柱であるのである。また、「わたしのため、また福音のために」（マルコ八35）の「わたし」は「自分を捨て、自分の十字架を負うて」（八34）とあるのであるから「わたし」の根底に実在する「子の神・キリスト」においてある「わたし」であり、「御国の福音」とは「子の神・キリスト」・福音の原音に拠って成り立っているのであり、「子の神・キリスト」に基づいて、「言葉のメシア」と「行為のメシア」とに分岐して現われるのであり、共に「子の神・キリスト」の現われであるからどちらも大切であり、等価であるが、しかし「子の神・キリスト」に基づく、その直接的な現れである言葉が先であり、その間接的な現れである行為が後であるという「秩序」がそこに必然的に生じるのであり、マタイは「子の神・キリスト」に「視点」を置いて、歴史のイエス・「イエス・キリスト」を精確に再構成するためにはこの「秩序」が重大であると知って、「言葉のメシア」（五―七章）と「行為のメシア」（八―九章）の

順序を決定しているのである。マタイが四23において、マルコにない「御国の福音」を「諸会堂で教え」と「民の中のあらゆる病氣、あらゆるわずらいをおいやしになった」との真中に挿入している真実の意味は「御国の福音」の現われである「言葉のメシア」と「行為のメシア」の背後に「インマヌエルの原事実」という「御国そのもの」「子の神・キリスト」が実在し、それに基づいて成り立っているというふうに理解することによって明確になるのである。換言すれば地上のイエスの言葉と行為から離れたものでないが、それらの根底に・それらと次元を異にする・それらが指し示しているインマヌエルの原事実（「子の神・キリスト」・神の国）が実在する。この「子の神・キリスト」・「神の国」が福音そのものであり、人イエスがその言葉と行為によって指し示そうとしたものである。「悔い改めよ、天国は近づいた」といわれる、「天国」こそ福音そのものであるのである。「地上のイエス」はこの「子の神・キリスト」・「神の国」をその言葉と行為でもって表現された、さらには人間イエスは「子の神・キリスト」・「神の国」を言葉（真理）と行為（命）でもって完全に表現された、とすることができるのである。言葉（真理）と行為（命）との秩序・順序はその直接的な現われが先であり、その間接的な現われが後である。

六

終りに、U・ルツの「序論的全体像（四・二三―二五）」についての解釈を、彼の『EKK新約聖書注解 I / 1 マタイによる福音書（1―7章）』³⁷⁾に拠って検討する。その際四・二三に「御国の福音」ということがでてきているので、イエスの宣教活動の要約である四・一七の「悔い改めよ。なぜなら、天国は近付いた」に関するルツの解釈も、合せて検討する。

まず構成に関して、「二三節は九・三五で殆んど逐語的に繰り返されている。それによって、マタイは五―九章の明白な囲い込みを作り出している。とりわけシュニーヴィントは、二三節がこの章の構造をも先取りしていることを示した。「言葉のメシア、説教するメシアが五―七章で、行為のメシア、癒しを行なうメシアが八―九章で描写されている」というのである。Γαλιλαία（ガリラヤ）、κηρύσσω（宣べ伝える）、およびβασιλεία（王国、王支配）という標語でもって、二三節は、四・一二、同一五、同一七に繋がる。διδάσκω（教える）という標語は五・一一二を予示する。したがってわれわれの段落は、五―九章の表題ではあるが、明らかに結合的性格を持ち、また推移のペリコペーでもって、主要部を区切り分ける代わりに、むしろ結合するというマタイ的傾向を例示するものである。二四―二五節も編集的観点のもとに入

念に表現されており、五・一一二と、七・二八―八・一、八・一六と共に山上の説教の枠を形成している。形式的には、われわれのテキストは要約である。その中ではイエスの癒しの活動が主たる場所を占めており、これに続く五一七章のように教えが主たる場所を占めているのではない。」³⁸⁾と。

次に編集について。「ごちない構成は資料から説明される。要約それ自体はマルコに対応するものを持ってはいないが、伝承に拘束されたマタイは本当に若干の点でしか自由に表現することがない。二三節の決定的な標題文はなるほど彼の創作であるが、しかし、マルコー・三九に密接に結びついて表現されたものである。二四節の基礎はマルコー・二八、同三二、同三四であり、二五節のそれはマルコ三・七―八である。したがって、福音記者は彼のマルコ資料の広範な部分を概観し、それを抜粋しているのである。彼は、マルコからどのテキストを落すか、すでに前もって正確に知っている。彼は十分に考慮された計画に従って仕事を進めている」³⁹⁾とルツは洞察している。

解説において、U.ルツは、まず概要を述べ、個々の節の解釈にはいる。「マタイは、イエスの教えと癒しの活動から何かある個々の記事を記す前に、総括的要約を構想する。それを再度取り上げる多数の箇所によって、典型的なものという印象が生じる。五一九章の中で続く、イエスの告知と癒しの活動を記す諸断片が個々の例である。したがってマタイは、イエスの業についての歴史的伝記的経過を記そうとするのではない。むしろ、彼は全体像でもって始め、この全体像を、この後に続く叙述の中で個々の例でもって具体化するのである。」⁴⁰⁾と。そして、二三節について。「福音書記者は二三節 a の前置された小文（「彼はガリラヤ全土を巡り歩いた」）を、一九・一にある同様に強調された新しい始まり（「彼はガリラヤを去った」）まで続くところの一切に関連させている。この編集は、彼がイエスをまずは彼の居住地たるカペナウムの周辺に居るものと心に描いていることを示す。「彼らのシナゴグにおける」イエスの教えは、二重の事柄を暗示する。すなわち、イエスはイスラエルに向い、彼の奇跡活動が選びの民に向けられるのと同様、イスラエルの教師として、シナゴグで教える。しかし同時に、強調された「彼らのシナゴグ」は、福音書記者と彼の教会が彼ら自身の立場をこのシナゴグ以外の所に持っていたことをはっきりさせる。「宣べ伝える」と「教える」が二つの異った事柄を意味するものでないということは、マタイ福音書全体からのみ見て取れることである〔註「マタイは、イエスが、従順であることを通して、神の子なのであると言おうとする。イエスは、神の愛という根本的戒めを堅持することで神の子である。神の子性のこの理解は、人間的な存在に対する一つの見通しをも開く。神の子は、模範的に、ただ神の言葉からのみ生きる、そして、ただ神にのみ聞

き従う、と。この文が弟子たちにとってなにを意味するか、それをマタイ福音書全体が展開している、と言うことが出来よう。イエスが、そもそも彼自身の告知を始める以前に、三度聖書〔神の言葉〕を引用していることもまた、偶然ではない。⁴¹⁾〕。宣教告知の内容を、マタイは三・二と四・一七ですでに暗示していた。近い御国に鑑みて悔い改めることにかかわるものである。五―七章では、マタイが「教え」のもとで理解していることが展開される。教えに並んでイエスの癒しがある。福音書記者は、イエスのもとにあらゆる病人が持ち込まれたこと、そして彼はどんな病気も癒したことを、強調している。彼はイエスの癒しの奇跡から、いわば「標準的」活動を作りあげているのである。その際、彼にとって重要であったのは、恐らく、イエスの奇跡力を誇張することよりは、むしろ、宣教に対する神の僕の従順であり（八・一四―一七〔夕暮になると、人々は悪霊につかれた者を大ぜい、みもとに連れてきたので、イエスはみ言葉をもって霊どもを追い出し、病人をことごとくおいやしになった。これは、預言者イザヤによって「彼は、わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うた」と言われた言葉が成就するためである。〕参照）、また彼が原則的に人間へと向っていることであった。……二四節では、マタイは「悪霊にとり憑かれた者」、「てんかん」、「中風の者」という三つの標語でもって病気の癒しを暗示し、その癒しに、後で（八・二八―三四、九・一一―八、一七・一四―二一）例示的に戻ってくる。山上の説教を顧慮して、イエスの癒しの活動の要約的叙述が先行していることは重要である。確かにマタイはまず第一にはイエスの教えに関心があり、それゆえに五―七章を八章と九章の前に置いた。しかし、教師イエスは、彼の救いの力でもって人間——教会も——に同伴する神の子にほかならず、それゆえ、民衆の群れが彼の後に従い得るのである。そして、二三―二四節は、マタイで非常にしばしば見逃される、救いの「直接法」を暗示しているのである⁴²⁾と、ルツは、五―九章の構成の秩序・順序を洞察している。二五節について。「イエスの活動の心像^{イメージ}には民衆の群れが彼に従うということが含まれている。「従う」とはどんなことか、読者は四・二一から知る。マタイは、民衆の群れの従いによって、彼が四・一八―二二の従いの物語を典型的なものとして理解していることを暗示するのである。したがって、民衆の群れと一八―二二節の従う弟子達とは、二つの、相互に絶対的に区別さるべき集団と理解されてはならない。むしろ、マタイはこのような仕方、弟子の群れは教会へと拡大するものだとすることを暗示するのである。彼は、民衆の群れも弟子と一緒に山上の説教の聴衆であるのだろうという。彼の山上の説教理解を確かなものとするために、民衆の群れを編集構成的に用いもしているのである。それというのも、山上の説教では、弟子達に語られることは、イエスの後に従うように呼び掛けられる民衆にもまた当てはまるからであ

る。地理的な叙述の意味に決着をつけることは容易なことではない。……しかしとりわけ、デカポリスの地方は、大部分が、「聖書的イスラエル」に所属する地方であった。したがって、恐らくは、福音書記者はイスラエルにおけるイエスの活動とその成功に関して語ろうとしたのであろう⁴³⁾と。

さらにマタイの「福音」理解について、U.ルツは、「付論 マタイにおける告知する、教える、および福音」において詳しく触れている。二三節の解釈と関わりがあるので、取り上げておこう。「マタイではディダケー（教え）に並んで、ないしはそれ以前に、更に特別なケーリュグマ（宣教使信）が存在するのだろうか。κηρύσσεινとδιδάσκεινの関係についての問は、こうしてマタイ神学の根本的問いとなる。一つの示唆を、マタイが四・二三と九・三五と二四・一四でκηρύσσεινと結合しているεὐαγγέλιον τῆς βασιλείας（御国の福音）の表現が与えるかもしれない。彼は、マルコにとって非常に重要な表現であるεὐαγγέλιονに首尾一貫して手を加えている。福音が、すなわち教会の告知が、地上のイエスを超越しているか、あるいは地上のイエスと並び立っているかのように理解される箇所〔註 マルコ一・一（告知の始めとしてのマルコの書）、八・三五、一〇・二九（イエスが現在の中に「延長したもの」として、イエスに並んでのεὐαγγέλιον）〕は、いずれも皆削除している。全く首尾一貫して、εὐαγγέλιονを付加語で限定している。Τῆς βασιλείας（御国の）の付加語によって、彼はεὐαγγέλιονのもとに地上のイエスの告知を理解していることをはっきりさせる。しかし、二六・一三〔よく聞きなさい。全世界のどこでも、この福音が宣べ伝えられる所では、この女のした事も記念として語られるであろう。〕は、それがイエスの言葉に関係しているだけではなく、同様に、彼の行為にも関係していることを明白にする。マタイにとっては、教会のすべての告知（εὐαγγέλιον）が地上のイエスによる方向づけを持っており、この地上のイエスの言葉と行為以外に他のなんの内容も持っていないということが、決定的に重要なことである。Εὐαγγέλιον τῆς βασιλείαςの表現は、「マタイの作品の彼自身による大要・要約である」。地上のイエスの告知と業とは、キリスト教的告知の唯一の基準また内容となる。……マタイがεὐαγγέλιονと地上のイエスの告知と業とを同一視することは、彼の著作の前提である。そのことは総て、マタイ福音書の全体から、御国の¹宣²教³告⁴知と神が望んだ行為に関する⁵教⁶えとは切り離すことができないということを意味する。福音書を連続して読む者は、三・一一二と四・一七の、根本的発言に見られる告知の内容の定義を想起するであろう。しかし、この御国の宣¹教²告³知は、初めから、その頂点を行為への呼び掛けに持っている。それと一致することを、われわれは山上の説教で再び目にする。それは、διδαχή（教え）である（五・二）が、しかし、弟子に向けられたものであ

るだけでなく、民衆にも向けられたものである。ここにイエスが守るように命じた(二八・二〇)彼の戒めがある。しかし山上の説教は天国を展望しつつ始まるが、この天国が告知される福音の内容を形成するものである(四・二三)。したがって、山上の説教は御国の福音を前提するのではなく、御国の福音なのである。」⁴⁴⁾と。つまり「マタイではディダケー(教え)に並んでないしはそれ以前に、更に特別なケリュグマ(宣教使信)が存在するだろうか」という問に対して、ルツは「地上のイエスの告知と業」である「山上の説教が御国の福音である」と答えるのである。

——以上、我々はU.ルツの「序論的全体像(四・二三-二五)」についての解釈、宣教告知の初め(四17)から、復活のイエスの宣教委託(二八・一六-二〇)を視野に入れた教会論的なその解釈を聞いたので、その批評を試みることにする。

まず、いま聞いたばかりの、ルツの「マタイ福音書」の「福音」についての解釈を問題とすることにする。ルツは「マタイにとっては、教会のすべての告知(εὐαγγέλιον)が地上のイエスによる方向づけを持っており、この地上のイエスの言葉と行為以外に他のなんの内容を持っていないということが、決定的に重要なことである」⁴⁵⁾と言う。そしてその証拠として、マルコ福音書にある「福音が地上のイエスを越え出ているか、あるいは地上のイエスと並び立っているかのように理解される箇所はいずれも皆、マタイは削除している」ことを挙げる。具体的には「神の子イエス・キリストの福音のはじめ」⁴⁶⁾(一・一)と「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失うものは、それを救うであろう」(八・三五)、「イエスは言われた、「よく聞いておくがよい。だれでもわたしのため、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、もしくは畑を捨てた者は」(一〇・二九)における「福音」が「地上のイエスを越え出ているか、あるいは地上のイエスと並び立っている」ので、マタイはその「福音」を削除していると言うのである。そしてルツは後者の理由として、「イエスが現在の中に「延長したもの」として、イエスに並んでの福音」とそれが解釈されるからと言う。しかしながら「わたしのため、また福音のために」の「わたし」は、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」(八・三四)の「わたし」である。つまりイエスの場合においても「自分を捨て、自分の十字架を負う」⁴⁷⁾た「わたし」である。換言すれば、人イエスの身心の落ちてしまうところ、キリストと呼ばれたイエスの消滅するところに、土のちりに還えるところに既に来ておられる「神の国」・「子の神・キリスト」を指し示す「わたし」、「子の神・キリスト」を完全に映し出している「わたし」である。従って、この「わたし」は、人であり・メシア

である「地上のイエス」を超えたものであり、歴史（時間・空間）を超えたものであり、「神の国」・「子の神・キリスト」（インマヌエルの原事実）のことである。この「神の国」・「子の神・キリスト」についての「福音」であるから、「わたくしのため、また福音のため」と言うことができるのである。従って、マタイがこの「福音のため」を削っているとしても、その理由が「地上のイエス」から離れたり、並んだりした「福音」と誤解されるからというのではありえない、「神の国」・「子の神・キリスト」は「地上のイエス」と離れないどころか、一つであるのである。ルツは「地上のイエス」ということで人であり・メシアであるイエスを理解しているが、この「地上のイエス」ということが曖昧であるのだ、イエスのペルソナの分析が不十分なのである。従って、この意味で、マタイは「福音」を積極的に明確にするために「御国の福音」と言っているのである。「地上のイエス」から離れたものではなく、それを超えているがそれと一つである「神の国」・「子の神・キリスト」を、「わたしのため、また福音のために」（八・三五）の「わたし」及びそれと同格の「福音」は、意味しているのであるから、この「福音」は「神の子・キリスト」・「神の国」のことを言っているのである。従って、この「福音」は、イエスによって宣教された「福音」の源泉・原音であるから、それと区別して「原福音」・「第一義の福音」と呼ぶほかはないであろう。マタイ四章二三節の「諸会堂で教え」と「民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった」の真中にマタイによって挿入された「御国の福音を宣べ伝え」の「御国の福音」とは「原福音」（＝「神の国」・「子の神・キリスト」）のことであり、「教え」と「癒し」・「言葉」と「行為」を超えており、それに基づいて、「教え」と「癒し」とは分岐して成り立ってくるのであり、マタイが「神の国」・「子の神・キリスト」に視点をおいてイエスの宣教活動を精確に再構成しようとしているが故に、宣教活動において「言葉」（原福音の直接的映し）が先であり、「行為」（原福音の間接的映し）が後になるという秩序を持ったものとしてそれを描き出しているのである。従って、マタイが四章23節でマルコにない「御国の福音」を挿入したことについてルツは「地上のイエスの教えと業」とが「福音」であるから、「教え」と「いやしの業」と同じ次元のこととして受けとめているようであるが、マタイの意図は「教え」と「いやしの業」と「御国の福音」とは次元を異にするものであり、前二者は後者の二つの現われであると、しかもその二つの現われの秩序・順序に関して、「教え」が先であり、「いやしの業」が後であると、受けとめられることである。

次にルツの四章一七節「悔い改めよ。天国は近づいた」についての解釈を問題にしたい。「御国の福音」とは「神の国」・「子の神・キリスト」のことである。この場合に「福音」とは「原福音」ということであれば、「御国」と「福音」は同じ事実をさしている

ことになる。要するに「インマヌエルの原事実」を意味しているのである。そうだとするならば、ルツの、イエスの最初の宣教告知・イエスの宣教告知の要約である「悔い改めよ。なぜなら、天国は近付いた。」についての解釈つまり「近い御国に鑑みて悔い改めること」という解釈は誤解ということになる。なるほどルツは、マタイがマルコの宣教活動の要約である「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」を、「御国の」という付加語によってマタイは「福音」を「地上のイエスの告知」つまり「地上のイエスの言葉と行為」と理解しているのであるから、「地上のイエスを越えて出ているか、あるいは地上のイエスと並び立っている」と理解される恐れのある「福音」を削除するというマタイの方針によって、「福音を信ぜよ」を削り、「近い御国」であるから、「時は満ちた」とすると「御国が到来した」とことと誤解されるから、それもマタイは削除して、また「悔い改めて」を倫理的な戒めと理解して、つまり「御国に入る」ための神の要求（「行為への呼びかけ」と受けとめて、「悔い改めよ」（命令形）として、「なぜなら天国は近付いた」の前に位置づけて、「悔い改めよ、なぜなら、天国は近付いた」と簡潔にした。これでイエスの宣教活動の肝腎なもの・必要にして十分なものを言い尽してると考えた、というのである。しかしながら、「天の支配は、マタイでははっきりと、まだ到来していないものとなる（一一・一二と一二・二八で初めて、またそこでのみ、天の支配が今やすでに突入しているということを読者は聞き学ぶ！）。それは、神が彼の審判において自らを啓示する、間近に近づいた真理の時である」⁴⁸⁾とルツは言うが、マタイは「地上のイエス」という曖昧な事柄をさらに分析（イエスのペルソナの分析）して、「地上のイエス」が捨てられ、十字架に架けられるところに、「地上のイエス」の絶対的限界のところに、「子の神・キリスト」・「神の国」を発見しているのである。「福音」ということで、この「インマヌエルの原事実」を第一義的に意味させているのであるから、「天の支配は、まだ到来していないものとなる」ということは、まったくのマタイ福音書の誤解である。それは、一・二三「その名はインマヌエルと呼ばれるだろう」と二八・二〇「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」という大枠の下にあるのであり、マタイ福音書の大前提であり、マタイは、そこに視点を置いて福音書を構成しているのである。また「悔い改めよ」というのは、自分の罪を認めよという倫理的な神の要求というよりも、マルコが「悔い改めて福音を信ぜよ」と言っているように「原福音」・「インマヌエルの原事実」を無視した生き方・在り方（これが罪といわれる在り方・生き方）から「原福音」・「インマヌエルの原事実」に方向転換して、「インマヌエルの原事実」を信頼して生きようということである。従って、ルツの「一一・一二と一二・二八で初めて、またそこでのみ、天の支配が今やすでに突入しているということを読者は聞き学ぶ！」

という曖昧な言い方も問題である。イエスは「インマヌエルの原事実」に信頼して生き・活動しておられるので、一二・二八の「わたしが神の霊によって悪霊を追い出しているのなら、神の国はすでにあなたがたのところに来たのである」とは、イエスは、自分を捨てて「子の神・キリスト」のところに来ておられる「父なる神」の力によって、悪霊を追い出しておられるので、根源的に・太初から実在する「インマヌエルの原事実」に基づいて、そこに来ておられる「父なる神」の力・「神の霊」によって、悪霊を追い出しておられるから、二重につまり存在的にと作用的に「神の国」を前提にしているのである。従って、「またそこでのみ」とルツは言うが、事柄そのものを理解していない証拠である。イエスの言葉と行為は、いづれも・どこでも「インマヌエルの原事実」を前提にしているのである。ついでに言うと、ルツは一一・一二「バプテスマのヨハネの時から今に至るまで、天国は激しく襲われている。そして激しく襲う者たちがそれを奪い取っている」も「天の支配が今やすでに突入している」と解釈しているが、その解釈は問題である。マタイの「天国」は「インマヌエルの原事実」であるから、それが「激しく襲われる」とか「それを奪い取って」ということがどうして言えるであろうか。

終りにU.ルツの画期的な、教会論に基づく、四・二三と五―九章の構成についての解釈を取り挙げる。ルツは「ガリラヤの海辺での弟子の召命（四・一八―二二）」（この段落は「ガリラヤにおける教会の始まり（四・一二―二二）」の一節である。）の解釈において次のようにマタイの構成について語っている。「むしろマタイは、地上のイエスと、現在働く高く挙げられた主と一緒に眺めるのである。そうして、この、教会の起源に関する歴史 [四・一八―二二] は、彼にとっては、同時に「典型的な」意味を持つ。天国に関するイエスの福音が告知されるころでは（四・一七）、人間はラディカルな従順へと呼び掛けられるのである。そのようにして教会は生起したのであり、生起するのである。総括句四・二三―二五において、二三節と二五節が併存することは同一の思想を表現するものである。そして最後に、この思想は、続く数章の構造をも決定するものである。つまり、「マタイは言葉（五―七章）と行為（八―九章）とによるイエスの活動を描写する。しかし、この描写は直ちに弟子たちの活動へと、また教会へと（一〇章）導く。明らかに、マタイにとっては、教会論的次元はイエスの告知と業の歴史に所属している。まさにそれゆえに、プロローグにおいても [[イエスの活動の始め（三・一―四・二二）]、神の子イエスのガリラヤ到来の結果と目的とは、教会の成立であることがはっきりしなければならないのである。「異邦人のガリラヤ」は教会の発生地なのである。]⁴⁹⁾ と、ルツは教会の起原という観点から四―一〇章の構成について説明している。さらにルツは「序論的全体像（四・

二三―二五)」において、マタイ福音書の構成について、「マタイの関心（マタイの神学）」という観点から説明する。「宣教告知の内容〔二三節〕を、マタイは三・二と四・一七ですでに暗示していた。近い御国に鑑みて悔い改めることにかかわるものである。五―七章では、マタイが「教え」のもとで理解していることが展開される。教えに並んでイエスの癒しがある。福音書記者は、イエスのもとにあらゆる病人が持ち込まれたこと、そして彼はどんな病気も癒したことを強調している。彼はイエスの癒しの奇跡から、いわば「標準的」活動を作りあげているのである〔二四節〕。その際、彼にとって重要であったのは、恐らく、イエスの奇跡力を誇張することよりは、むしろ、宣教に対する神の僕〔神の子〕の従順であり、また彼が原則的に人間へと向っていることであった。……三つの標語でもって病気の癒しを暗示し、その癒しに、後で（八―九章）例示的に戻ってくる。山上の説教を顧慮して、イエスの癒しの活動の要約的叙述〔二四節〕が先行していることは重要である。確かに、マタイはまず第一にはイエスの教えに関心があり、それゆえに五―七章を八章と九章の前においた。しかし、教師イエスは、彼の救いの力でもって人間——教会も——に同伴する神の子にほかならず、それゆえ、民衆の群れが彼の後に従い得るのである〔二五節〕。そうして、二三―二四節は、マタイで非常にしばしば見逃される、救いの「直接法」を暗示しているのである。イエスの活動の心像^{イメージ}には民衆の群れが彼に従うということが含まれている〔二五節〕。「従う」とはどんなことか、読者は四・二一から知る。彼が四・一八―二二の従いの物語を典型的なものと理解していることを暗示するものである。したがってマタイはこのような仕方でも、弟子の群れは教会へと拡大するものだとすることを暗示するのである。⁵⁰と、ルツは、五―十章の構成を、マタイの関心・マタイの神学という観点から、つまり癒しの業において「宣教に対する神の僕^のの従順」が重要であること、そして「マタイはまず第一にイエスの教えに関心がある」ことによって「宣教」・「教え」（五―七章）を先に、癒しの業（八―九章）をその後^に置くことにした、と。

そして以上のような教会論的観点のもとには「マタイは、地上のイエスと、現在働く高く挙げられた主と一緒に眺めるのである」というマタイの神学があると、ルツは言う。我々は四・二三において、マタイの「視点」と歴史のイエスを再構成する社会科学的方法が論ぜられていると考えるのであるが、「地上のイエスと復活の主と一緒に眺める」ということがマタイの「視点」であるとルツは言うのであるが、既に我々が見た如くに「地上のイエス」という概念が曖昧であり、「復活」ということがどういうことか説明されずに「復活の主」と言っているにすぎず、いずれも曖昧な両者を「一緒に眺める」ことがどうして可能であろうか。我々は「地上のイエス」・

人間でもありメシアでもあるイエスが、十字架に架けられて、人間の身心もメシアの働きも消滅し、「土のちり」に還えるところ、人間イエスの絶対的限界、人間イエスの根底に「子の神・キリスト」・「神の国」が既にすでに、世の太初から実在するのである。この人間イエスの根底に、それと一つである「子の神・キリスト」・「神の国」が、人間イエスの生死の懸っている・拠っているものであり、人間イエスの「復活」の積極的な根拠でもあるのであるから、十字架の死の後の「復活のイエス」が厳密に即事的なこととして考えることができるのである。マタイは、十字架に架けられてイエスと一つである「子の神・キリスト」——この「子の神・キリスト」はイエスの根底にもあるし、どんな人の根底にも実在するものである。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために〔また福音のために〕自分の命を失う者は、それを見いだすだろう」（一六・二四―二五）とイエスが言う所以である。——に「視点」を置いて歴史のイエスを精確に厳密に即事的に再構成しようとしているのである。「わたしは道であり、真理であり、命である。だれもわたしによらないでは、父のみもとに行くことができない」（ヨハネ一四・六）とイエスが言う様に、「子の神・キリスト」・「神の国」に「視点」を置くことによって、「父なる神」によって「子の神・キリスト」において創造され、保存されている被造物を厳密に即事的に考察し、再構成する「方法」も開けてくるのである。「真理」である「子の神・キリスト」においてある人イエスは、精神的にその真理を直接映し出す・表現する側面があり、「命」である「子の神・キリスト」においてある被造物は、身体的に、土のちりから創られたからだにおいて間接的に「命」を映し出す、表現する側面がある、この二側面をもった秩序ある存在、それが人間イエスである。従って、歴史のイエスを厳密に即事的に再構成しようとするならば、「道」・「真理」・「命」である「子の神・キリスト」に立ち返って、それに基いて成り立っている秩序に即してイエスを描き出すという「方法」が開かれてくるのである。この「方法」は社会科学の方法に通じるのである。従って、ルツの教会論に基づく、マタイの関心（マタイの神学）による、四章―十章の構成についての画期的な解釈も、四章二三節の「諸会堂で教え」と「民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった」と「御国の福音を宣べ伝え」との三者の関係が曖昧な「地上のイエスの言葉と行為」によって考えられているので三者を同一視するものとなっているので、つまりマタイの視点が「子の神・キリスト」・「神の国」に置かれていることを見ていないので、依然として五―七章が八―九章よりも先にきており、八―九章を正しく「福音」として正しく受けとめられるために後に来ている、その秩序・順序が必然的であったということの説明・解釈にはなっていない

のだ。

[二〇一三・七・一〇]

註

- 1) 塚本虎二「イエス伝研究」第一巻 聖書知識社 昭和63年
- 2) 「イエス伝研究」第一巻 pp.250-251、塚本虎二訳である。そうでない場合は「新約聖書（1954年改訳）」（日本聖書協会）の訳に拠ることとする。
- 3) *ibid.* p.251
- 4) *ibid.* pp.251-252
- 5) *ibid.* p.228
- 6) *ibid.* p.230
- 7) *ibid.* pp.230-232
- 8) *ibid.* p.232
- 9) *ibid.* p.261
- 10) *ibid.* pp.263-264
- 11) *ibid.* pp.264-265
- 12) *ibid.* p.266 なお「罪を赦す権威」に関して塚本虎二は次のように語っている。「宇宙の間に、不動の道徳的秩序があり、その秩序の紊乱〔アダムの罪に発している（ロマハ19以下）〕によって、宇宙上のすべての擾乱と禍害と、不幸とが来たれるものである。それはただ神の唯一の子、罪なきイエス・キリストの手によりてのみ原状に回復せらるべくある。」（*ibid.* p.267）この「不動の道徳的秩序」ということは、マタイ福音書に拠れば「インマヌエルの原事実」ということではないのか。そうだとすると、その原事実がアダムの罪によって「その秩序の紊乱」が生じたのであるということがどういふことなのか、また「イエス・キリストの手によりてのみ原状に回復せらるべくある」ということがどういふ意味で言われうるのかも問題となってくることであろう。
- 13) *ibid.* p.258
- 14) *ibid.* p.228
- 15) *ibid.* p.232
- 16) *ibid.* p.258
- 17) *ibid.* p.264
- 18) *ibid.* p.265 及び p.266
- 19) *ibid.* p.238
- 20) *ibid.* p.258
- 21) *ibid.* p.265
- 22) *ibid.* pp.266-267
- 23) *ibid.* p.252
- 24) *ibid.* p.266
- 25) *ibid.* p.228
- 26) *ibid.* p.231
- 27) Eduard Schweizer, *Das Evangelium nach Matthäus, Übersetzt und erklärt*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1973 E・シュヴァイツァー『マタイによる福音書 翻訳と註解』（NTD新約聖書註解）佐

竹明訳 NTD新約聖書註解刊行会 1978

- 28) 「マタイによる福音書 翻訳と註解」 p.89
- 29) シュヴァイツァーのこの節の解釈は「マルコによる福音書 翻訳と註解」高橋三郎訳 NTD新約聖書註解刊行会 1976 (E. Schweizer, Das Evangelium nach Markus, Übersetzt und erklärt, Vandenhoeck & Ruprecht, 1975) p.53 即ち「イエスのもろもろの業と言葉においてきたるべき御国はすでに彼の許に到来しているのである。彼が将来神の国の中にいるかどうかということが、いま決定される。だからこそ、彼は今すでに、きたるべき国に入る [という言い方がなされる]」であり、イエスの弟子たちとの会食や、教団における聖餐^{せいさん}において、またイエスの力を身に受け、その御言によって動かされるということにおいて、きたるべき御国の力はすでに、その発現を開始しているのである。かくてイエスの中において、現在と未来が一つに結ばれている。」と。
- 30) 「マタイによる福音書 翻訳と註解」 p.87
- 31) ibid. pp.236-237
- 32) ibid. pp.253-254
- 33) ibid. p.90
- 34) ibid. pp.91-92
- 35) ibid. p.79
- 36) ibid. p.237
- 37) Ulrich Luz, EVANGELISCH-KATHOLISCHER KOMMENTAR ZUM NEUEN TESTAMENT I / 1 : Das Evangelium nach Matthäus, Benziger Verlag und Neukirchener, 1984. ウルリヒ・ルツ「EKK新約聖書註解 I / 1 マタイによる福音書」小河陽訳 教文館 1990
- 38) 「マタイによる福音書」 pp.249-250
- 39) ibid. p.251
- 40) ibid. p.251
- 41) ibid. p.231
- 42) ibid. pp.251-253
- 43) ibid. pp.253-254
- 44) ibid. pp.256-257
- 45) ibid. p.256
- 46) 新約聖書からの引用は「新約聖書 1954改訳」日本聖書協会に拠っている以下同じ。
- 47) イエスはゲッセマネの園での祈りにおいてのみ「自分を捨て、自分の十字架を負う」ておられるのではなく、その生涯において、その活動において、そうであった。積極的にいえば「子の神・キリスト」に、「神の御心」にいつも服従されておられたということである。
- 48) ibid. p.242
- 49) ibid. p.246
- 50) ibid. pp.252-253

[以上]